

かたの瓦版

この時、交野は動いた

「聞いて、聴いて、推古天皇米」

かん でん
官 田

官田は律令体制下での天皇の供御田(くごでん)をいうのであって、宮内省管轄下の直営田で、大和・摂津・河内・山城に合計100町歩あった。

供御とは貴人の食事をいうが、特に天皇の食事を指している言葉である。

米を主として、魚・鳥・野菜・果物などの副食物とがある。

供御田は天皇の主食となる米を生産した水田である。

私部の南、寺から流れてきた南川の南西側の交野第一中学校から落合橋より私市へ出る道までの間の水田地帯である。



堂ヶ辻や鳥ヶ坪よりは一段高く、湿田よりも稲田から乾田になる地域で米の質も良いのであろう。この地で収穫された米が大和へ運ばれて天皇の食膳にのぼったものと思われる。

もう一つは「干田」「乾田」が「官田」の字に訛ったのではないかということである。

天野川筋の氾濫原や後背湿地の土地である。西河原・堂ヶ辻・鳥ヶ坪よりは一段高い、堤防が切れて水没する時でもここ官田はそのようなことはない。

逆に夏は日照りで水不足に悩んだ土地ではなかったか。

南川も天井川であり、夏は水がほとんどないので、かんがい用としては不向きである。

交野には、私部・私市といった珍しい地名が付けられている。

この私部という地名がどうして付けられたのか。歴史的にさかのぼってみると次のようである。

日本書紀 卷第二十 ^{ぬなぐらのふとたましき} 淳中倉太珠敷天皇(^{び たつ}敏達天皇)の条に

五年春三月 ^{やよい} 巳 ^{つちのとう} 卯 ^{ついたちつちのえ} 朔 ^ね 戌 ^{つかさ} 子 有司請立皇后。詔立^{とよみけかしきやひめのみこと} 豊御食炊屋姫 ^{きさき} 尊為皇后。

=中略= 六年春二月 ^{きさらぎ} 甲 ^{かのえのたつ} 辰 ^{ついたち} 朔 ^{ひのまつりべ} 詔置日祀部 ^{きさべ} 私部 =後略= とある。

*第 30 代・敏達天皇…**御名・異名** 詛語田淳中倉太珠敷尊

生没年 538 生(在位 572-585 14 年)→585(48 歳没)

父 第 29 第・欽明天皇 **母** 石姫皇女 **皇后** 息長広姫、豊御食炊屋姫(額田部皇女・推古天皇)

*第 33 代・推古天皇…**御名・異名** 額田部、豊御食炊屋姫

生没年 554 生(在位 592-628 27 年)628 年没(75 歳没)

父 欽明天皇 **母** 蘇我堅塩媛

- ・容姿端麗で、物事を処するに乱れることがなかった
- ・18 歳で敏達天皇の皇后となり、34 歳の時に天皇が崩御した
- ・そして 39 歳のときに崇峻天皇が暗殺され、額田部皇女が豊浦宮で即位した
- ・日本最初の女帝である
- ・聖徳太子(20 歳)を補佐役とした

「私部(きさべ)」が現在の地名「私部(きさべ)」なのである。

「きさいちべ」、これは皇后(后、きさき)のため、いろんな仕事をしたり、世話をしたりする役所のことであり、かつ、その世話をする人々を指している言葉でもある。

正式には「私府(きさいふ)」と言い、その任に当たる人を「私官(きさいかん)」と言った。この言葉はもともと中国で使われていたもので、後漢書にはこれに「后」の字を当てて「きさき」と読ませている。

この制度というか、あるいは言葉を日本に持ち込み「私」の字を当てて「きさき」「きさい」と読ませていたのである。

後のために付けられた土地を耕作する農民や身の回りの世話をする人々などがいて、彼らを総称して「私部(きさいちべ)」と言った。いわゆる部民(べのみ)である。

豊御食炊屋姫(とよみけかしきやひめ)、のち推古天皇。欽明天皇の第三皇女で母は堅塩媛(きたしひめ)と言い蘇我稲目(そがのいなめ)の娘であるが敏達天皇の皇后となったとき、時あたかも朝廷では大和の大豪族である蘇我氏と物部氏が権力を手中に収めようと勢力争いの最中であった。

その折、蘇我馬子(蘇我稲目の子)は、めいに当たる豊御食炊屋姫を皇后としたことによって、その勢力は確固たるものとなった。

一方、先を越された物部守屋は、これに対抗するため、物部氏にとって重要な土地である交野の地を皇后に献上することによって、天皇への接近を図り、勢力を盛り返そうとしたのであった。

物部氏は河内の八尾辺りと交野が勢力の中心地でもあったのである。

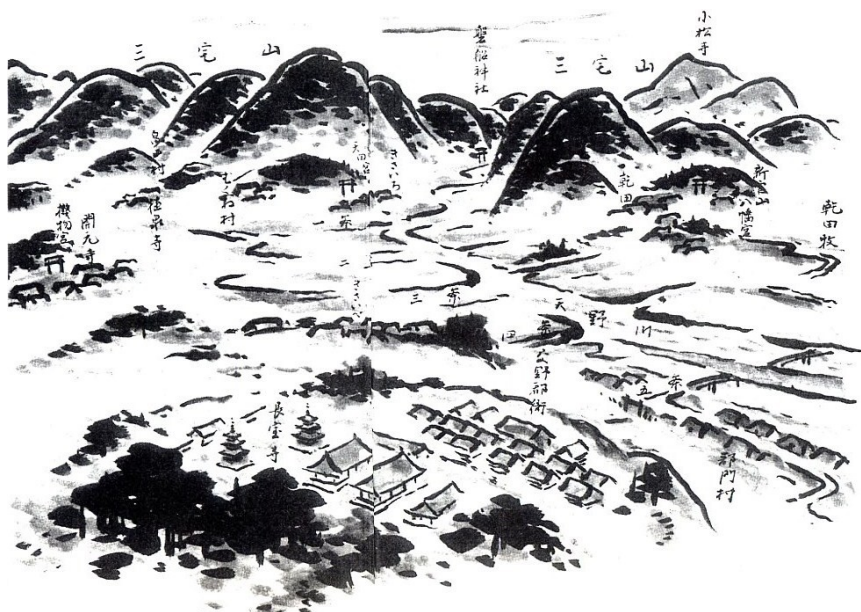
そのもう一つの勢力の中心を皇后に渡したのであるから、相当の犠牲であったであろうと思われる。

このときから交野は皇后領となり、交野の村々は皇后の部民に組み入れられたのである。

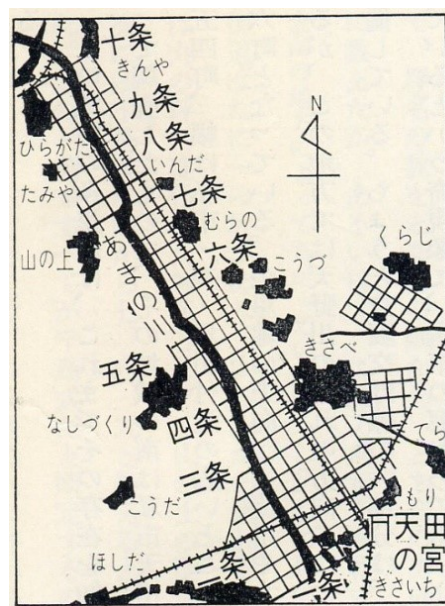
交野皇后領の中心になったのが私市であり、私部であったと思われる。

後、天野川筋の豊かな土地に条里制が施行され、私市の天田宮付近から一条で始まり、私部は三条、

四条、郡津が五条と、枚方の方へ、天野川下流へとつられていった。



平安後期の交野地方想像図



古代天野川条里図

交野地方では私部付近が一番豊かな土地が多く、収穫も多かったであろう。

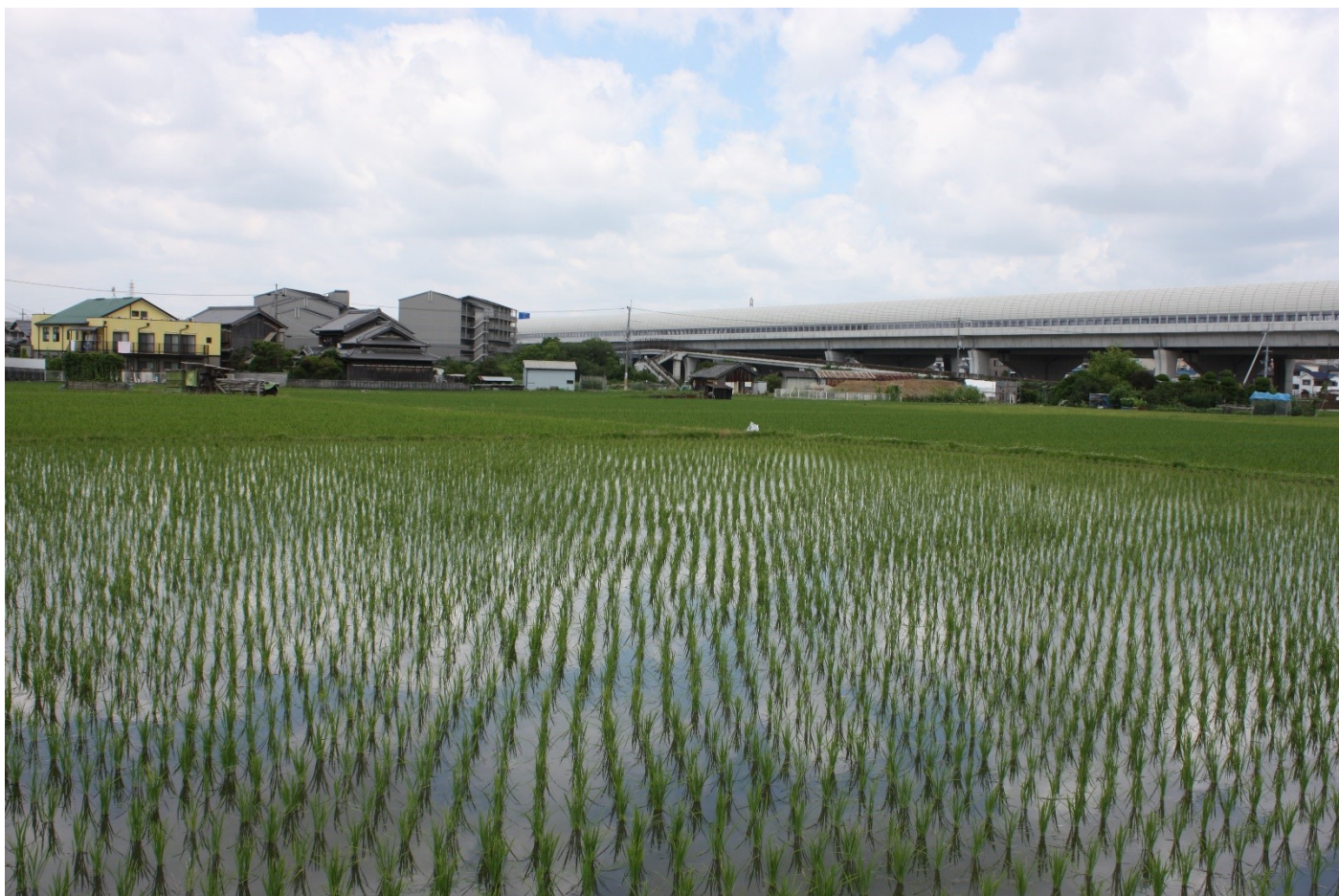
そして、交野の中心地として集落の規模をもつようになった。

それとともに「きさいちべ」がだんだん訛って「きさべ」となったものと考えられる。

私部の集落は天野川の条里制のあった低地を避け、東方の少し高い台地状の所に立地している。

また、台地の谷を避けている。

ただ、東高野街道から外れているので交通網からは少し不自由であったと思われる。



官田



官田とタデの地名表示



中筋通り



美味しいお米の生産地が



もう、復活はない住宅開発が着々と

タデ

私部の中でここだけ片仮名で書かれている。「タデ」とは何を指すのだろうか。多分「タテ」であろう。漢字で表わせば「楯・館」であろう。普通「楯・館」は丘陵地の先端部、前面が崖になっているような地形が選ばれる。それは防御面が一番立地の条件が良いのである。ところが私部の場合は平坦な水田地帯である。ではどうして？。「タデ」の中の小さな地名を拾って行って考え合わせていくと「タデ」ではなかったかと思えるのである。南川と北川が合流する所に架かっている橋を「落合橋」という。この橋から私市へ通じる道(通称:学校道)がある。

この道を南へ200mばかり行った所の道際の田を「大門(だいもん)」と呼んでいる。この地で戦国時代末期、私部の豪族北田久衛門尉好忠が大和郡山の城主筒井順慶と争った場所だといわれている。

北田久衛門尉好忠は私部本城を守るため、天井川である南川を前面の防御線とした。そして、落合橋の前面に出城といった楯(館)を大門の地に造り、私市方面(大和から磐船街道を越えて出てくる)からの前線基地にしたと考えられる。その大門が「楯・館」の地名で残ったものと考えられる。

参考資料:交野市史(民俗編)・わがまちふるさとかたの地名たずねて



落合橋付近の現在の風景

ああ～「推古天皇米」、獅子窟寺の薬師さんに病氣平癒を祈願しての帰りに落合橋の売店で推古天皇米をお土産に……このストーリー消えた。